

九州大学学術研究都市構想

～うみ・やま・さと・なぎさに広がる知の創造空間～

平成 13 年 6 月

九州大学学術研究都市推進協議会

ごあいさつ

九州大学の福岡都市圏西部への移転に伴う大規模なキャンパス構築や大胆な大学改革を支援するとともに、九州大学を中心とした新しい学術研究都市の創造を目指し、構想の確立とその実現を期して平成10年5月7日、地元産学公の総意に基づいて九州大学学術研究都市推進協議会が設立されました。

爾来、3年間にわたり諸外国はもとより、筑波や関西をはじめとする既存のわが国の学術研究都市を超えた魅力的な学研都市づくりを目指して、構想の策定について取り組んでまいりました。専門的事項を専門調査委員会や各種ワーキンググループに精力的に検討いただき、伊藤滋先生を委員長とする構想検討委員会による実質的な審議を経て、このほど協議会としての整備構想を取りまとめるに至りました。この間の関係各位のご協力に対しまして、お礼申し上げます次第です。

この構想では、「知の創造空間」をめざす新しい学術研究都市の基本構想に始まり、知の交流・創造活動を促進する地域科学技術システムの構築、知・住・悠の舞台となる快適空間の形成、さらに、今後の構想の推進方策の基本的な考え方や具体的な取り組み体制等に関して提案しています。

一方、九州大学では、平成13年3月に「新キャンパスマスタープラン2001」が策定され、新しい九州大学のキャンパスにおいて、大学改革による国際的・先端的学術拠点としての大学の構築、研究・教育施設の整備を進めることとされています。

協議会では、本構想をもって学術研究都市像のあるべき姿を提示したわけですが、今後は、よりよい九州大学、よりよい学術研究都市づくりを目指して、皆様方の理解を得つつ、本構想を具体的に展開して着実な整備が行われていくことを願ってやみません。

平成13年6月

九州大学学術研究都市推進協議会
会長 大野 茂
((社)九州・山口経済連合会会長)

1. 学術研究都市の意義と全体像

1 - 1 構想の意義

21世紀は「知の時代」とみられています。20世紀の科学技術のめざましい進歩によって、先進国を中心に高い経済成長がなされ、人々は豊かで便利な生活と長寿を手にいれました。しかし、他方では、貧困と疾病に悩む途上国との格差の拡大、地球温暖化と新しい化学物質による汚染といった地球環境問題など負の側面も深刻となりました。こうした人類の存続にかかわる地球的な課題に直面している21世紀において、「持続的発展」のための科学技術、異文化理解と全人類の共生のための学術文化の発展は、ますます重要となっています。加えて、経済のグローバル化の中で激しさを増す国際競争において、生産性の向上と新製品の開発・新産業の創出による日本の産業競争力を強めることは、必須の課題であり、そのための科学技術力の強化とこれを支える次世代の研究者の育成も「知の時代」に強く求められています。コンピュータ・ネットワークの世界的な普及による情報の蓄積・創造・輸送の大容量化・高速化は、21世紀の「知の時代」の到来を決定的なものにしました。

こうした時代潮流の中で、日本の科学技術と学術文化の創造を担い、次代を担う人材を育成してきた大学は、「知の拠点」としてますます重要な存在となっています。なかでも、民間セクターに依存することが困難な理工系や医薬系の研究と人材育成の中核を担う国立大学の役割は、21世紀前半の日本の帰趨を制するものとみることができます。

九州大学は、平成7年策定の「改革の大綱案」に基づき、全国的に最も大胆な改革を推進してきました。この間、比較社会文化、数理学、システム情報科学、人間環境学など新しい学際領域の独立大学院を相次いで設立するとともに、既存の大学院の整備充実をはかり、平成12年に大学院重点化を完了し、「研究大学」としての使命を鮮明にしました。同時に、大学院を教官の研究組織としての研究院 (Faculty) と教育組織としての学府 (Graduate School) に分離し、両者の柔軟な連携を図る「学府・研究院制度」を全国にさきがけて導入しました。また、特定の学部には所属せず、自らの問題意識のもとに全学のカリキュラムを自由に選択できる学生を別枠で入学させ、教育する「21世紀プログラム」を開始し、全国的な注目を集めています。さらに、「アジア総合研究機構」や「韓国研究センター」を設置し、アジア研究重視の方向を明確にしました。

九州大学は、世界的レベルの学際的研究・教育を推進する「研究大学」の構築を「空間的」に実現するため、福岡都市圏近郊の糸島半島において学際的な連携と研究者間の競争を促す21世紀型のキャンパスの構築に向けて大きく動きだし、そのデザインは、「九州大学新キャンパスマスタープラン2001」(平成13年3月策定)に具体化されました。

自然に恵まれ、アジアとの交流を育んできた福岡市から唐津市にいたる地域を、新しい理念に基づく広大なキャンパスを核とする「九州大学学術研究都市」として整備することは、21世紀の「知の時代」に巨大な「知の拠点」をつくることを意味しています。このことは、平成13

年3月に策定された政府の「科学技術基本計画」における「科学技術システムの改革」の重要な一角を形成するとともに、福岡・佐賀両県によって推進されてきた「九州北部学術研究都市（アジアス九州）構想」の「龍」の目玉となるもので、構想は、21世紀の初頭に大きく新たな一歩を踏み出したと言えます。「アジアス九州構想」は、筑波、関西に次ぐ日本の第三の学術研究都市の構築をめざすもので、「環境・人間・アジア」をキーコンセプトとしたものです。筑波や関西と異なり、地方分権・地域連携という新しい時代の流れを反映して、地域の大学・自治体・産業界など連携型の学術研究都市づくりを進めています。

「九州大学学術研究都市構想」は、「科学技術基本計画」における「新たな科学技術システムの改革」、「21世紀の国土のグランドデザイン」（全国総合開発計画）における地域の「科学技術の振興と産業創出風土の醸成」という政府の戦略、福岡・佐賀両県のアジアとの連携を強く指向した九州北部学術研究都市（アジアス九州）構想、そして九州大学の先導的の大学改革と新キャンパスづくり、こうした一連の動きを総合的・立体的にとらえ、21世紀の「知の時代」に相応しい、地域の「知の拠点」、「知的クラスター」づくりを目指すものです。「九州大学学術研究都市構想」は「知の創造・交流を促進する地域科学技術システムの構築」というソフトの構想と、「知・住・悠の舞台となる快適空間の形成」というハードの構想が融合されたものです。

1-2 構想の対象エリア

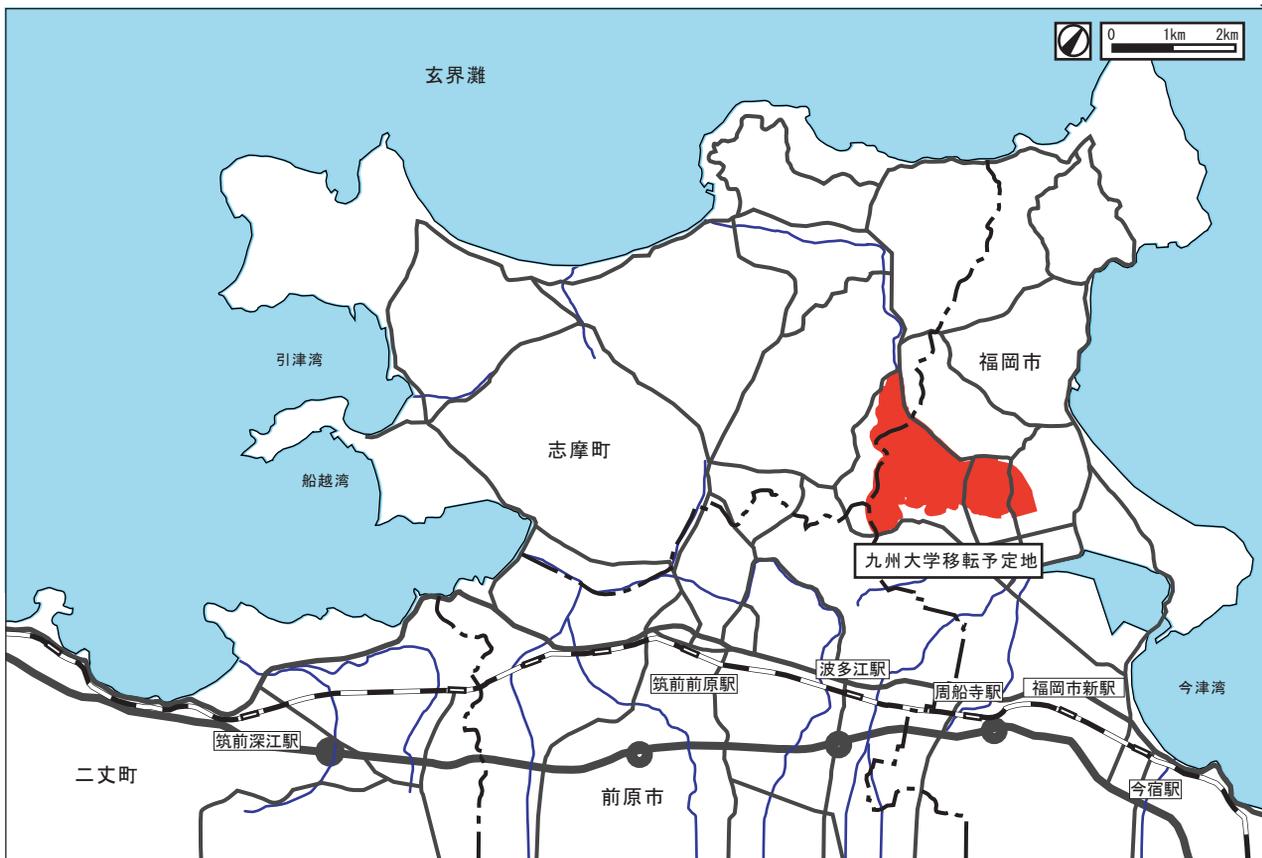
九州大学を拠点として展開される知的活動は、アジア九州（5ページ参照）の拠点地域や九州全体、日本国内はもとより、アジア、世界との交流と連携を視野に入れて行われるものですが、本構想では、福岡市から唐津市に至る玄海灘に面するゾーンを対象エリアとしています。

また、この広域ゾーンの中で学術研究都市の中核として、九州大学新キャンパスを中心として生活圏を形成する糸島全体を1次圏とし、福岡市から唐津市までの九州大学新キャンパスから半日で行動できるエリアを2次圏として、知・住・悠の舞台となる快適空間の形成を目指します。

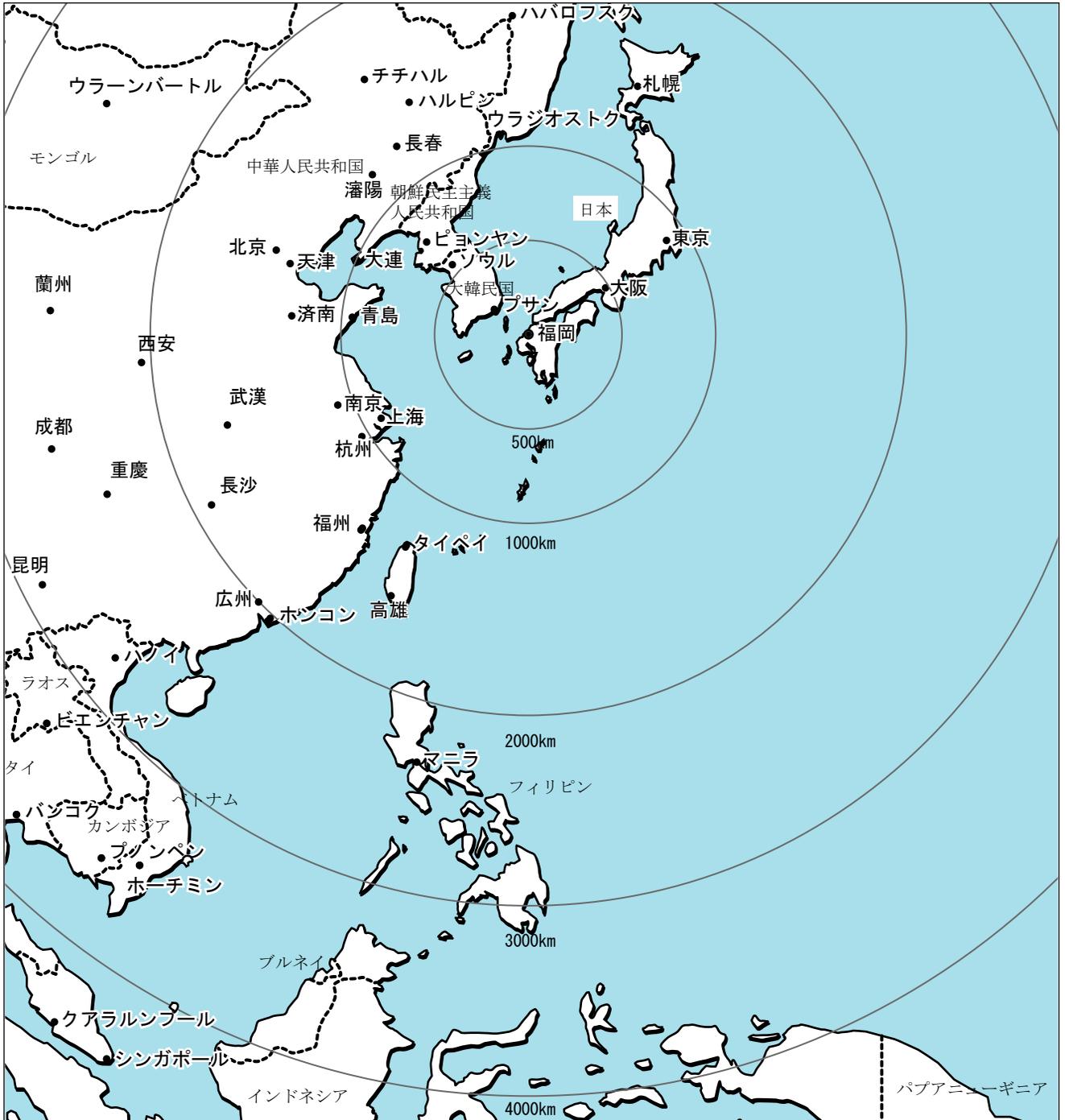
構想対象エリア



1次圏



アジア広域図



参考 九州北部学術研究都市(アジアス九州)構想における福岡拠点地域の位置づけ

九州北部学術研究都市(アジアス九州)構想は、福岡県、佐賀県にまたがる九州北部地域の高次の都市機能と活発な学術研究機関、多様な産業集積を背景に、日本の研究開発、国際交流、学術文化の南の拠点として、九州・アジアの21世紀をリードする文化・学術研究拠点を創造しようとするものです。

構想の基本コンセプトは、「環境・人間・アジア」とし、都市機能、学術研究機能の有機かつ重層的なネットワーク化を図り、21世紀型の「人間志向型社会」に相応しい地域づくりを推進するものです。

構想地域には、北九州から佐賀に至る7つの拠点地域が設定され、いずれも都市機能、学術機能等の集積が存在しています。

北九州拠点地域は、国際テクノロジー都市として、歴史的な産業集積と学術研究機関の蓄積に加えて、北九州学術研究都市整備が市の西部地域に展開され、国公立大学による連携型の大学院システムや国内外の産学連携機関の立地など、新しい学術研究都市の形成が進められています。

一方、九州大学学術研究都市を含む福岡拠点地域は、全国有数の大学機能の集積と、アジアとの文化・経済交流機能やその活動の蓄積などを背景として、九州・アジアの文化・学術研究の交流拠点都市の展開を目指しています。

その他の拠点地域においても、大学や研究機関を核として都市機能との連携による都市づくりが進められています。

これらのアジアス九州構想の拠点地域の中で、九州の中核都市としてのポテンシャルを持つ福岡拠点地域において、全国有数の知的資源を有する九州大学を核とした学術研究都市づくりを推進することは、アジアの文化・学術研究拠点をめざすアジアス九州構想の大きな推進力となることが期待され、さらに各拠点地域との連携によって、九州全体、アジア・世界との交流と連携が活発化することが期待されています。

九州北部学術研究都市(アジアス九州)構想の7つの拠点地域の役割



1 - 3 構想の全体像

九州大学学術研究都市構想は、九州大学が有する「知」の活用を軸として、主体的な「個」の育成、「知」の融合と触発を推進する社会システムの構築、自立性と活力に満ちた地域社会の実現を目指します。

さらに、糸島地域という自然豊かな場所に展開する大学と地域資源の協働による共生社会の実現、それぞれの個性を持つ地域の広域的連携による地域づくりなど、21世紀の地域連携時代における先導的モデルとなることによって、世界・アジアとの交流を促進し、新産業の展開を進めていきます。

(1) 構想の理念

九州大学学術研究都市構想の実現に向けて、「共生社会の実現」、「世界・アジアとの交流」、「創造性の発揮」、「新産業の展開」という4つの理念をもとに、構想を推進していきます。

共生社会の実現

地球環境問題は、21世紀における最重要課題であります。本構想地域は、豊かな自然環境を有する一方、九州大学を核とする秀れた知的資源、そして福岡都市圏の膨大な人的資源を有しています。

この多様な地域資源を活用して、豊かなライフスタイルを実現し、質の高いコミュニティを形成し、資源循環・省エネルギーに配慮した「共生社会の実現」を目指します。

世界・アジアとの交流

魏志倭人伝では、糸島地域に「伊都国」、唐津地域に「末魯国」、福岡地域に「那国」があったとされ、古くより大陸文化と日本文化の交流の地であり、現代に至るまで大陸との交流拠点でありました。

本地域の持つ交流機能をさらに高め、国際交流を先導する西日本のゲートウェイ・エリアとし、温もりのある人間的な交流と定住の舞台として、世界・アジアの人々との交流ができる情報ネットワークを構築し、21世紀文明を創造する知的交流を推進します。

創造性の発揮

新しい価値の創造に向け、知の交流・融合が求められる「知の時代」においては、個性や人間性を尊重し合い、豊かで充実した生活をだれもが享受できるような地域社会をつくることが重要です。

本都市は九州大学を核とする学術研究都市であり、癒しとリフレッシュの環境づくりによって、自由な発想と個人、異文化を尊重する創造的な研究・教育・交流の風土の形成を目指します。

新産業の展開

本構想の対象地域である糸島半島には、陶芸家や染色家などが定住し、芸術活動も盛んです。また、新規に就農するものやS O H O等在宅型の就業形態もみられるなど、新たな経済活力の萌芽がみられます。

こうした芽を大切にしながら、大学・研究機関を中核として、地域社会の課題発見・解決に向けた産業コミュニティを形成することによって、グローバルな競争力を持つ知識産業・知的クラスターの形成を進めます。

(2) 構想実現のための戦略

九州大学学術研究都市構想は、4つの理念と展開の方向性を踏まえた、「知の創造空間」の構築に向けて、「知の交流・創造活動を促進する地域科学技術システム」を構築すること、これを展開し実現する空間として、「知・住・悠の舞台となる快適空間」を形成することを2つの核としています。

知の交流・創造活動を促進する地域科学技術システム

人間・社会・地球のための「21世紀科学」の創出と展開とともに、これを促す舞台づくり、「知の活用」による産業と地域の活性化を推進する「知の中央ステーション：HST (Human, Science and Technology Station)」を戦略拠点として構築します。

「科学技術システム」とは、科学技術基本計画において「社会の理解と合意を前提に資源を投入し、人材養成及び基盤整備がなされ、研究開発活動が行われ、その成果が還元される仕組み」と示されており、人文・社会科学を含む広義の科学技術システムを意味しています。

知・住・悠の舞台となる快適空間

快適空間の形成においては、地域の自然、歴史、産業との共生を理念として、研究・交流・居住・生活サポート等の集積ゾーン、環境・景観等の保全ゾーン、田園風景の維持・育成ゾーン、商業・業務・サービスの機能集積を図るゾーンなどの空間構成を検討し、地域の特性に応じて、保全・維持、整備・開発・誘導等の方策を掲げています。

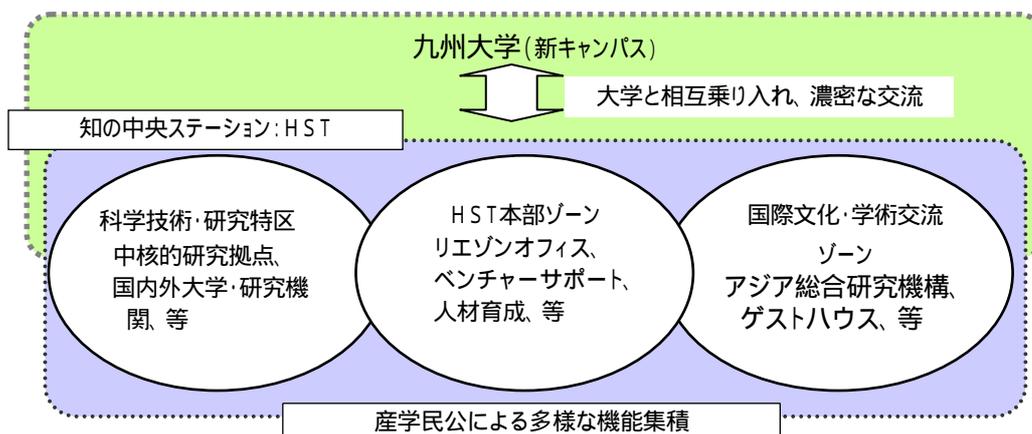
(3) 提案プロジェクト

地域科学技術システム、快適空間の形成において、様々な中心的なプロジェクトを提案しています。

知の中央ステーション：HST (Human, Science and Technology Station)

「知の中央ステーション：HST」は、知の交流・創造活動を促進する地域科学技術システムの構築を推進する戦略的拠点です。HSTの展開においては、「タウン・オン・キャンパス」(学術研究都市の「顔」となる新キャンパスのセンター・ゾーンとその隣接地区)を中心として、HST本部ゾーン、科学技術・研究特区、国際文化・学术交流ゾーンなどを形成し、産学民公の連携機能、企業スタートアップ支援機能など、様々な研究・開発機能の整備・展開を進めます。

また、HST展開のプレステージ事業として、学術研究都市のシンボルの一つとなる先行的モデルプロジェクトや、そのための先導的インフラ整備を、「スマートダウンタウン福岡」との連携を視野に入れながら進めていきます。



学術研究都市コアゾーン

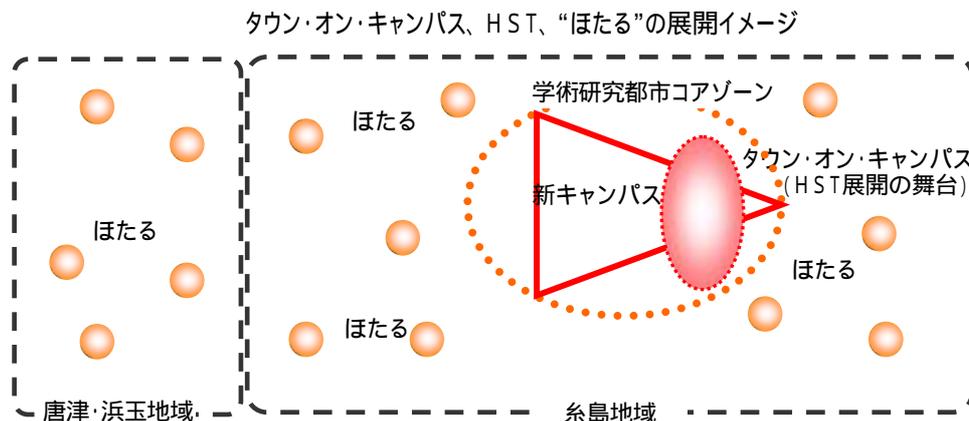
「学術研究都市コアゾーン」は、九州大学新キャンパス及びその周辺において、先導的で中心的な役割を果たす研究・開発機能の集積を図るとともに、学生などの居住を受け入れるゾーンです。本地区の整備については、大学と民間及び行政等の連携・協力のもとで、具体化を進めていきます。

タウン・オン・キャンパス

「タウン・オン・キャンパス」は、学術研究都市の「顔」「シンボル」となるゾーンとして整備するものです。HST展開における研究開発機能、研究交流機能、高水準なキャンパスライフを実現し、国際交流、地域交流を支える交流・居住・生活サポートなどの機能の導入を図ります。

分散型地域核“ほたる”

「分散型地域核“ほたる”」は、タウン・オン・キャンパスからスピノフする研究開発や産業機能、進出を希望する研究・開発企業、さらに新たな居住の受け皿として、機能展開するものです。かつての大規模開発型に代わる21世紀のモデルとして、糸島地域、唐津・浜玉地域での“ほたる”の展開は、「自然農業保全・共生ゾーン」を中心に自然、景観等、地域の環境と共生するよう進めます。



市街地形成ゾーン・田園ゾーン

「市街地形成ゾーン」は、東西の広域交通軸を中心に、商業・サービス・オフィス機能の充実と新たな立地誘導を図っていくゾーンです。また、この中には、地域の中心的な役割を果たす地域拠点ゾーンを含みます。

「田園ゾーン」は、都市的土地利用を規制し、糸島を特徴づけるのびやかな田園風景を地域資産として維持・保全するゾーンです。

交通、情報ネットワーク

「交通ネットワーク(U悠トランジット)」は、環境と福祉両面への対応を考慮し、公共交通とパーソナル交通のバランスを図りながら、学術研究都市にふさわしく、ゆとりを持った交通ネットワークの整備を進めます。

「情報ネットワーク(アジア情報ハイウェイ)」は、情報通信環境の動向および社会情勢の変化に留意しつつ、九州大学の多様な知的資産を活かして、世界・アジアとの温もりと親しみのある交流を支えるネットワークの構築を進めます。

(4) 推進手法・推進体制

学術研究都市構想を長期にわたって推進していくための推進体制の構築が不可欠です。また提案プロジェクトを実現していくための具体的な方策が必要です。

そのため、産学民公の連携組織（九州大学学術研究都市推進協議会）を存続・強化するとともに、総合窓口、計画の調整、プロジェクトの提案・推進など、具体的な業務を担う推進組織（（仮称）九州大学学術研究都市整備推進機構）の設立を進めます。

また、構想の具体化に向けて、学術研究都市の理念、各セクターの責務を明らかにし、関係者の共通認識とする（仮称）九州大学学術研究都市憲章の制定も進めます。

(5) 目標年次

九州大学の新キャンパスへの移転計画では、第 1 ステージの移転開始時期は、概ね平成 17 年頃が想定され、約 10 年で移転完了が予定されています。これを踏まえて、九州大学学術研究都市構想の目標年次は、新キャンパス移転完了から概ね 10 年後の平成 37 年と設定します。

九州大学学術研究都市構想の推進と九州大学新キャンパス移転事業

	2005 年	2015 年	2025 年
九州大学 新キャンパス 移転事業	工学系 理学系、文系 農学系		
九州大学 学術研究都市 構想	プレステージ 初期	中期	成熟期

【別掲】日本におけるアジア交流を先導する「九州大学学術研究都市」

背景 - 福岡に横溢する“アジアの風” -

アジア・太平洋地域の大学からの短期留学生受け入れと単位互換（九州大学、2001.7より）

「大学サミット・イン・九州」（2000.05）「九州大学 アジア学長会議」（2000.12）の開催（九州大学）

アジア太平洋都市サミットの展開（福岡市、1994、98年開催）

福岡アジアマンスの展開（福岡市、1990年～）

アジア太平洋子ども会議・イン福岡（福岡市、1989年～）

アジア太平洋センターの展開（福岡市、1992年～）

福岡-釜山間に高速船就航（JR九州、1991年～、年間24万人利用、2001年～、3隻体制）

フクオカベンチャーマーケットへのアジアベンチャー企業（マレーシア、香港、韓国等）の参加（福岡県）

福岡-韓国間の流出入の増加（博多港の入出国の外国人約11万人、韓国はその9割）

共同観光誘致事業 - 福岡市と釜山市の共同観光戦略 - の展開（福岡市・釜山市、2000年～）

福岡-釜山間に大容量光ケーブル建設（九電など国内企業と韓国企業の計4社、2002年春運用開始）

研究・開発分野

九州大学韓国研究センター（九州大学、2000年、韓国国際交流財団が韓国研究を助成）

九州大学アジア総合研究機構の展開（九州大学、2000年～）

九州大学国際研究交流プラザ（仮称）の展開（九州大学）

日韓海峡圏研究機関協議会（10機関）の共同研究実施（1993年日韓海峡知事会議提案、1994年～）

アジアの研究者に対する特別優遇措置を備えた「科学技術・研究特区」構想（九大学研構想）

アジアの若手研究者の受け入れシステム（アジアスカラシップ制度）の構想（福岡県）

居住・生活分野

国連人間居住センター（ハビタット）アジア太平洋地域事務所の活動展開（福岡県・福岡市、1997年～）

アジアの地域課題を念頭においた人間居住研究・研修センター構想（九大学研構想）

留学生（アジア中心）と日本人学生の本格的な混住型ドミトリーの展開（九大新キャンパス）

産業・経済分野

シリコンシーベルト福岡構想～アジアにおけるシステムLSI設計拠点（福岡県、九大学研構想）

アジアの経営、企業分析に独自性を有する「ビジネススクール」計画（地元財界、九大学研構想、九大）

海外人材の活動環境づくりに向けた福岡県の施策展開（海外高度人材活用施策）（福岡県）

九州大学学術研究都市構想の展開
 ～うみ・やま・さと・なぎさに広がる知の創造空間～

4つの理念

共生社会の実現

より豊かに生きるための知の創造と実践

世界・アジアとの交流

21世紀文明の創造に向けた知的交流の促進

創造性の発揮

知の創造・融合をリードする「個」の活躍環境の創出

新産業の展開

大学・地域の知の活用によるビジネスの創出と育成

展開の方向性

- 豊かな地域資源（自然・歴史・文化・暮らし）と調和したライフスタイルの実現
- 「生活の質」を持続的に向上していく地域コミュニティの形成
- 資源循環・省エネルギーに配慮した環境共生システムの実現

- 西日本の国際交流を先導するゲートウェイ・エリアとしての基盤を構築
- 温もりのある人間的な交流と定住の舞台づくり
- 世界中の人と親しく交流できる情報ネットワークの構築

- 人間・社会・地球のための21世紀科学を九州北部から世界へ発信
- 個人・異文化を尊重し合う創造的な研究・交流風土の形成
- 変化に機敏に対応できる創造的な人づくり、組織づくりと地域経営に挑戦

- 大学・研究機関を中核としたグローバル競争力をもつ知識産業・知的クラスターの形成
- 地域社会の課題発見・解決を行う産業コミュニティの形成
- 新たな経済活力を生み出す産学民公連携システムの構築

構想実現の戦略

知の交流・創造活動を促進する
 地域科学技術システムの構築

- “知の中央ステーション：HST”の戦略的構築
- 「21世紀科学」の創出・展開の舞台
- 異質なものの交わりと結合を促す仕掛け
- スマートダウンタウン福岡の展開
- “知のステーション”ネットワークの展開

知・住・悠の舞台となる快適空間の形成

- 研究・交流・居住・生活サポート機能等の集積ゾーン整備
- 環境資産及び景観資源の保全ゾーン整備
- 田園風景の維持・育成ゾーン整備
- 良質な環境共生型の分散型地域核“ほたる”の誘導・整備

提案プロジェクト

- HST（知の交流・連結・発信拠点）
 （HST本部ゾーン、科学技術・研究特区、国際文化・学術交流ゾーン）
- 「スマートダウンタウン福岡」の形成
- 先導的インフラ事業の整備
 （アジア総合研究機構、高等研究機構（検討中）、ビジネススクール、など）
- 先行モデルプロジェクトの推進
 （システムLSIプロジェクト（シリコンシーベルト福岡）、人間居住研究・研修プロジェクトなど）

- タウン・オン・キャンパスの形成
- 分散型地域核“ほたる”の展開
- 市街地形成ゾーン
- 田園ゾーン
- 交通ネットワーク
 （U悠トランジット）の形成
- 情報ネットワーク
 （アジア情報ハイウェイ）の形成

推進手法

- ・九州大学学術研究都市推進協議会（産学民公の構想推進体制）
- ・（仮）九州大学学術研究都市推進機構（HST構築の推進、学術研究都市づくりの総合マネジメント）
- ・（仮）いとしま計画連合（行政連合体、計画・調整・支援）
- ・（仮）九州大学学術研究都市憲章（構想の理念、共通の目標）
- ・DAF（ダウンタウンアライアンス福岡）（産学民公の知のコーディネータ・ネットワーク）

“知のステーション”の各拠点での展開と
 “知の中央ステーション：HST”
 (Human, Science and Technology Station)の構築

知の中央ステーション：HST（知の交流・連結・発信拠点）から生まれる多様な“ほたる”が糸島エリアに自立的な活動を繰り広げる

